

令和3年度・令和4年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（検証協力校）
研究成果報告書

1 学校紹介

房総半島の最南端に位置し、南は太平洋、北は山を背に東西に長く帯状に伸び、国道410号沿いに集落が点在している。温暖で豊かな自然に恵まれ、農業や漁業、観光なども盛んな地域である。本校は、全校91名の児童が在籍しており、学校教育目標の「共に学び、高め合い、豊かな心をもつ『活力ある白浜っ子』の育成」のもと、日々学習や運動に意欲的に取り組んでいる。

2 研究主題

学ぶ楽しさにふれ、一人一人の確かな学びを実現する授業づくり

3 研究の概要

（1）児童生徒の実態と課題

全国学力・学習状況調査の結果において、図形領域は全国平均と同等の数値だが、その他の項目は全国平均を下回っている。特に、解や理由を論述する問題に課題があり、無解答率も高いため、粘り強く問題に取り組む態度を育てていく必要がある。また、これまでに得た知識から自分なりに解答できる、書ける力の育成も必要である。

（2）学力向上のための取組

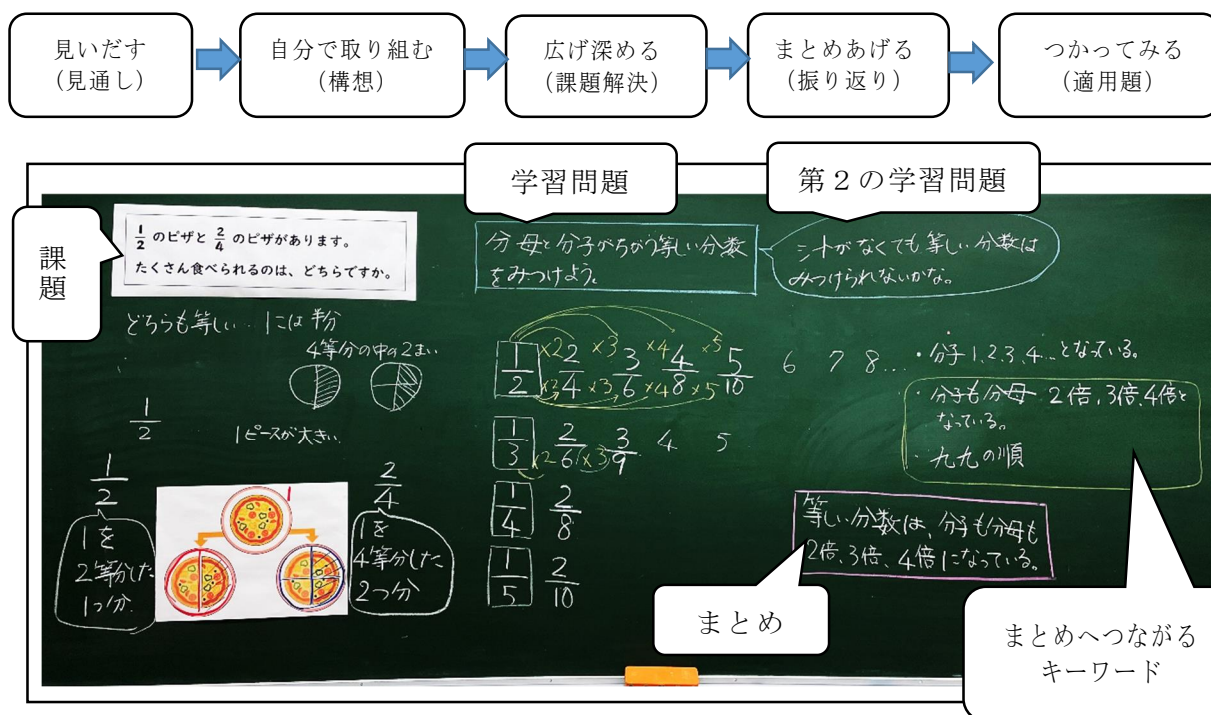
児童の実態及び課題から、粘り強く問題に取り組める力を育む必要性を感じた。そのためにはまず、45分の授業あるいは学んだその日のうちに習熟できる時間を必ずとることが大切ではないかと考えた。ICTの活用については、令和3年度はあらゆる場面で活用するよう取り組んだが、令和4年度はこれを見直し、必要性のある場面を吟味し、効果的だと思われる場面のみで活用を考えることとした。また、研究内容を明確にするため、令和4年度は以下の3つの柱を立て、研究を進めることとした。

- I 問題解決学習の取り組み方を工夫する
- II 45分の中で、習熟の時間を必ず設ける
- III 様々な場面で効果的にICTを活用する

I 問題解決学習の取り組み方を工夫する

全校共通で、新しい考え方や解き方、知識技能や概念を獲得する学習では、実践モデルプログラムを基盤とし、「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」「つかってみる」の問題解決学習過程で45分間を進めてきた。ここで、「まとめあげる」に加え「つかってみる」という習熟の過程を本校独自に設定することとした。また、「学習問題は、児童の言葉から立てる」「まとめは自分の言葉で書く」と「適用題は、必ず行う」ことは共通して取り組んだ。「児童が、自分で解決したい」と思えるように2段階の学習問題を立てたり、児童が自分の言葉で本時に学んだことを書けるように、比較検討時に話し合

われた中からキーワードを板書したりする工夫も行った。



II 45分の中で、習熟の時間を必ず設ける。

児童一人一人が自分で解決できたという実感を持つためには、まとめを使い自分で問題を解けることが重要であると考え、45分の中で習熟の時間を必ず設けることを意識し取り組んできた。しかし、習熟時間の確保や内容について吟味する必要があることがわかってきた。そこで習熟の時間を設けるために、課題に対して見通しをもたせる時間や、自力解決や比較検討の時間の精選を思考しながら学習過程を組み立てた。また、習熟の内容は以下のように目的を明確にして教科書やワーク、プリント、タブレットなどの問題に取り組みさせた。

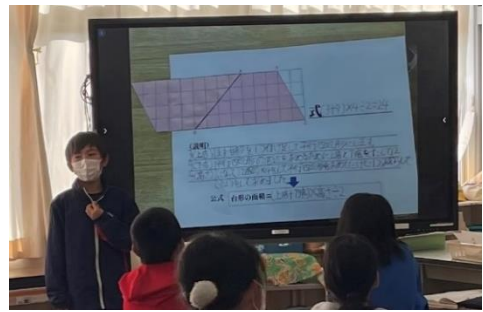
〈課題の目的〉

- ㊦ 1問目の課題・・・単元を習得するために作られた練習問題。学習問題を見いだす課題。
- ㊧ 2問目の課題・・・1問目を踏まえ、同じような課題だが数字を替えたり、基礎の問題を応用したりする課題。まとめへ繋げる課題。
- ㊨ まとめ後の課題(適用問題)・・・まとめを使用し、解答できるか確かめるための課題。
- ㊩ 自分で進める課題(適用問題)・・・まとめを使用し、学習内容の理解を図るための課題。

その他の習熟の取り組みとしては、児童のつまずきから単元の中に1時間習熟の時間を設けたり、日課時程に朝と昼に「スキルアップタイム」を設けたりした。どうしても授業内に終わらなかった課題を「昼スキ」に行ったり、朝は宿題の直しを行ってその日の授業前までに確認をしたりと有意義な時間となった。

Ⅲ 様々な場面で効果的にICTを活用する。

ICT機器の活用は、導入時の見通しをもたせる場面や比較検討時の児童の意見交換、習熟場面などでノートを電子黒板に投影し共通理解をしたり、タブレットを用いて個々に課題に取り組んだりという様々な場面で活用してきた。しかし、昨年度はICT機器の活用自体が目的になってしまったことが多かった。そこで、今年度は学習の必要性、効果的かどうかを考えながらの実践となった。児童が学習内容を理解するために、適しているのは具体物なのかICT機器の活用なのか、ということをご指導者がよく吟味した上で実践した。その結果、比較検討の場面で電子黒板にいろいろな児童の考えを写し出したり、グループごとの考えを発表したりという活用が多かった。また、教師が児童に課題を送ったり、児童個々の考えを教師に送ったりもしながら、個々のつまずきに目を向けるという活用も見られた。



(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

加配教員は、主にT2として活用した。例えば、支援が必要な児童のサポートはもちろん、電子黒板で発表している際に考えを黒板にもまとめるなど、授業を円滑に進めていくためのサポートも同時に行った。T1が話したことをより詳しく説明をしたり、具体物の操作を実演したりすることで、児童は安心して学習に取り組めた。また、習熟場面の採点や個別指導をT1と児童の進度をもとに分担して行った。



もともと児童数が少ないため、一人の児童を複数の目で個別支援でき、多くの問題にスムーズに取り組むことができていた。さらに、「どこがわからないか」や「どうしてちがうのか」についても進度をもとに分けたことで児童のつまずきのポイントが浮き彫りにされ、その場で再度指導することもできたと考える。児童が解く問題数が増えたのと同時に、自分で解けたという経験の積み重ねによって、児童の意欲面で向上が見られた。

4 成果

- ・学力向上のための3つの柱を設定したことで、学校全体として共通して取り組むべきことがはっきりした。その結果、目の前の児童にどんな支援が必要かを指導者同士が共通の視点で話し合うことができ、個々の工夫の幅が広がった。



- ・「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」に加え、「つかってみる」という実践モデルプログラムを基盤とした学びのスタイルが確立できた。この積み重ねによって、自分も課題を解決できるという自信から粘り強く課題に取り組む姿が見られるようになった。

- ・ICT機器の活用については、具体物が有効である場合もあることから、必要に応じて取り入れることが大切であることがわかった。また、タブレットの個別ドリルを活用し、一人一人の理解力に応じた個別最適化学習に取り組むことができた。
- ・学習過程のどの部分が短縮できるか、学習の順序性を吟味することで、習熟の時間の確保につながった。目的に応じて教科書の問題やワーク、タブレットを使用した。また、朝と昼のスキルアップに取り組み、つまづきをその日のうちに解決できるようにしたことで、児童が成就感・達成感を味わえる場面が増えた。
- ・3つの柱にはないが、どの学年も深める場面でペアやグループ活動を取り入れていた。その結果、自分の考えに自信を持ったり、他の考えを聞くことで思考を広げたりできた。
- ・全国学力・学習状況調査の基礎的な問題については、正答率が高くなっている。昨年度より、習熟の時間に力を入れて取り組んできたからだと考える。また、数と計算領域については無解答率が低くなった。既習事項を生かせば問題が解けるだろうという意識が芽生えてきていると考える。
- ・南房総市独自の学力テストでも知識・理解の問題は正答率が高く、ワークやタブレット学習などで繰り返し学習した結果が出ている。主体的に取り組む態度も目標値に近く、困難な問題にも粘り強く取り組んでいることがうかがえる。

5 今後の課題

- ・習熟時間の確保について工夫しているが、時には広げ深める場面に時間を要する場合もある。学習にはその時によって様々な形態がある。目の前の子どもをよく見て、柔軟に対応する必要がある。
- ・ICT機器の活用方法をよく考える必要がある。具体物が効果的な場合もあるので、使用目的と効果を考え、使い分ける必要がある。
- ・児童が自分で課題を解決するために、「共通することは？」「どっちいい？」と問いかけるなど、問い直しや発問についても模索していきたい。
- ・授業を円滑に進められるように、児童の支援方法や板書などT1とT2のよりよい役割分担を更に模索したい。
- ・学習問題やまとめは、児童が考えることができるようになってきているが、扱った一問だけに対する学習問題やまとめになっていることがある。学習問題やまとめは、一般化できるような教師の発問、学習過程をより考える必要がある。
- ・児童の「わかった」「楽しい」という言葉を聞くために一番大切なことは、実態把握や教材研究が大切であることが、改めてわかった。
- ・全国学力・学習状況調査の結果は、全体としては県平均・全国平均を上回ってはいないため、まだまだ十分な成果が現れているとは言えない。特に思考・判断・表現領域の正答率の向上、思考力が必要とされる問題に取り組む必要がある。
- ・思考・判断・表現の領域では、目的に応じてデータの特徴を捉えて考察する問題や加法と乗法の混合したポイント数の求め方を解釈する問題の正答率が低かった。南房総市の学力テストでも、基礎的な問題の目標値は到達しているが、活用問題は学年が上がるにつれ目標値を下回る傾向にある。思考力等の成果はまだ見えていないが、今後も本研究をベースに持続発展させることが必要である。